

秀吉の出世物語で有名な**蜂須賀家**は尾張の土豪でした。後に秀吉の四国征伐に従軍し、武勲を立てたので阿波国を領国として得ます。関ヶ原合戦では家康側に与して、阿波・淡路の両国を持つ徳島藩が成立しました。7代目に血統が絶えますが、8代目は讃岐国高松藩(水戸藩主の血筋)から、10代目は秋田佐竹氏から迎えるなど、巧みに乗り切って、幕末の14代**茂韶**にまで至りました。さて幕末のことですが、蜂須賀家の京都藩邸に、**闖入者**が一人現われたのです。

山家屋利喜蔵(小室**信夫**)……丹後国与謝郡岩滝町の縮緬機業・**山家屋**の分家の3代目です。山家屋の京都支店監督者を務めますが、尊王志士との交流を深めることになりました。

文久3年(1863)、仲間らと**足利將軍木像梟首事件**を引き起こしますが、高札に幕府への批判文を書いた人物のようです。いずれにせよ追われる身となり、逃げ込んだ先が徳島藩邸でありました。佐幕派(幕府擁護派)の藩としては扱いに困りましたが、ともかく牢内に留め置いたようです。

さて、維新政府になると倒幕に功のあった者を重用しますが、徳島藩は佐幕派ゆえに該当者がいません。しかし、留め置いた者が一人居たことに気付き、この者を藩士として(しかも家老格に等しい待遇を整えて)差し出し、面目を保つことができたのです。罪人が一転して功労者になったわけですが、こうして小室は新政府に出仕し、後に政界と実業界とで活躍することになります。

明治2年に岩鼻県知事、翌夏に徳島藩大参事、5年に蜂須賀茂韶の英国留学に随伴して渡欧。帰朝後には**民選議院設立の建白**に名を連ねる(建白書を古沢滋と共に起草)。東京～青森間の鉄道敷設にも尽力。明治15年には共同運輸会社(後に日本郵船と合併)を創立。24年に貴族院議員。

実業界へ転出したので、著名度の点で板垣退助・副島種臣・江藤新平・後藤象二郎・由利公正らに見劣りするようですが、丹後の**民権運動**の重鎮で、徳島にも明治7年に「自助社」を創立します。

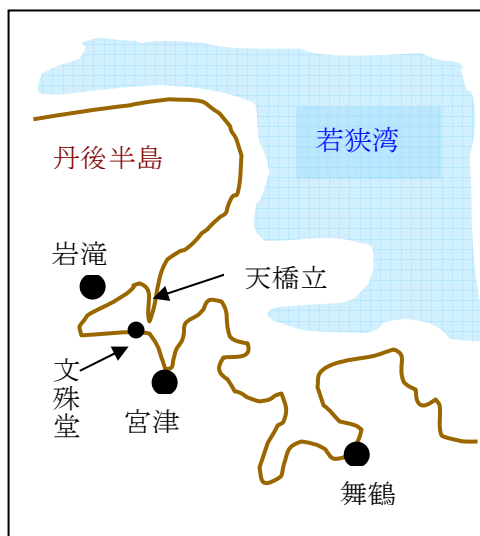
丹後 江戸期より縮緬機・漁業・廻船業が主要な産業。縮緬も**山家屋本家・利七**(後に**真名井純一**と改名)が米沢の製糸業に学び地元で普及させたものです。山家屋は廻船業や縮緬商を営む豪商で、宮津にある金毘羅神社には岩滝の豪商が奉納した船絵馬が数多く掲げられています。

この由良海岸は**森鷗外**の小説『**山椒太夫**』の舞台ですし、**水上勉**の『**五番町夕霧楼**』の夕子の出身地も岩滝でした。江戸中期の画家・俳人の**与謝蕪村**が一時期滞在しており、**与謝野鉄幹**の父・**礼巖**の生家が在った土地でもあります。

当地域で別格の存在は**天橋立**です。『古事記』と同じ頃に成立した『**丹後国風土記**』逸文の中でも、「此の里の海に長く

大きな**前**あり。長さは一千二百廿九丈、広さは或る所は九丈以下、或る所は十丈以上、廿丈以下なり。(中略) **伊射奈芸命**、天に通ひ行でまさむとして、橋を作り立てたまひき。故、天の橋立と云ひき。」と記されます。長さ3.2kmの砂嘴は日本三景の一つで、**知恩寺文殊堂**は日本三大文殊の一つです。**足利義満**などは文殊堂に6回も訪れており、**和泉式部**の歌塚もあります。当地の人々にとって天橋立は「神の住み給う所」であり、現実と理想郷をつなぐ“懸け橋”と呼べる存在でした。

ぬば玉の夜わたる月のすむ里は **げに久方の天の橋立** (藤原定家『拾遺愚草』)



天橋義塾(てんきょうぎじゅく) 明治の初期、官立の小学校はありましたが、15～20歳の若者が学ぶ教育機関などはありませんでした。かつては、藩校がそれを補っていたのですが、それでも「卒」と呼ばれる下級武士の子弟になると、藩校に通うことを許されていませんでした。まして農民ともなれば子供でも重要な労働力ですから、教育からは隔たった存在だったのです。小室をはじめ、地元の有志(特に豪農や豪商)が現状を憂え、教育機関の設立に奔走しました。

明治8年(1875)7月1日、『**天橋義塾**』設立に至りますが、小室信夫の民権運動が底流となって、**養子・信介**(小笠原長道)が**粟飯原曦光・沢辺正修・神谷広生**らと実質的な推進役を果たしました。

当塾は中等教育機関(学校)であるのは勿論ですが、三丹地区(丹後・丹波・但馬)の自由民権運動の拠点ともなり、地域活性化に貢献した意義がとて大きいですね。いわば大学と新聞社を併せたような存在でした。当時は自由民権運動が全国的に盛んで、多くの結社・団体が発足しましたが、天橋義塾は慶應義塾・立志社(高知)と並び、「**日本三大義塾**」とまで呼ばれる存在だったのですよ。余談ながら、我が同志社英学校の創立は同年11月29日ですから、それよりも5ヵ月早いんですね。

天橋義塾の社訓の第一条には、「**本社ノ目的ハ改進黨義ヲ以テ人材ヲ教育シ、兼テ丹後国民ノ智識ヲ開發シ、産業ヲ興隆シ、公共ノ福利ヲ増殖スルニアリ**」と記されており、大きな構想の下に設立されたことが分かります。「**改進黨義**」とは、旧弊を改め、近代的な考えで進歩を図るということで、「革新」に近い意味合いです。明治時代にはよく用いられた言葉です。

当塾は、最初は宮津小学校内の一棟を校舎としました。開業時には社員(教職員や理事など)が54名、生徒を含めても90余名の規模で始まったようです。尚、最盛時には合計539名でした。財政基盤は地元有志を核に住民の拠出金です。「**千人講**」という資本金制度を採用して、400余名から600余口の拠出がされています。因みに、小室一族では80口と、さすがに大口拠出者です。**旧藩主の本庄宗武**は既に東京在住でしたが、地元民の熱意に押されて20口を納めております。1口というのは5円、一般庶民には無理な金額ですから、出資者では豪農・豪商らが中心でした。また、諸経費は、加入社員の月給の3%(又は10銭)と授業料(月謝)10銭とで賄ったようです。

右表に学科の概要だけを示しましたが、運営上の特徴では、**集団教育**(上下級生合同)や**問答形式**(現在の大学のゼミナール形式に近い)、二部制を敷き夜学を設けた、原則寮生活などが挙げられます。上級生は下級生への手ほどきも担いましたし、問答形式は能力を鍛えるには最良の方法であったようです。

自由民権運動が高揚した時期ですから、いきおい政治絡みの討論となる傾向がありましたが、役所の監視がうるさいので、政府批判と受け取られないように、対外的には「**学術問答**」と言い換えていたようです。

なお、テキストはスマイルズの『自助論』(中村正直の翻訳で『西国立志論』)、ミルの『自由之理』、福沢諭吉の『民間経済録』など錚々たるものです。今時の大学の方が見劣りするかも知れません。とはいえ時代柄、漢学(漢文、『日本外史』、『十八史略』)なども必須科目で、歴史の中に含まれます。

当時は貧しい家庭が多く、1年だけ漢学の授業を受けるなどの例も多かったようですが、住民の受講熱は極めて旺盛でした。昨今の教育の現状を考えると、考えさせられますね。

読物	歴史・物理・地理・民法
修身	
習字	
問答	課題に従い討論
作文	いわばレポート
算術	

義塾の盛衰 当義塾の生い立ちが自由民権運動と深いつながりがあったように、義塾の盛衰についても民権運動と軌を一にしています。(右表参照)

西南戦争以降は、政府も言論統制を強化しているのが顕著で、私学(私塾)は官立の学校に認められた特典(例えば徴兵猶予)も無く、当然ながら退学者が激増しました。経営も瀕死の状態で、同志社英学校なども同様でした。尚、長男は免除されたので、急遽養子縁組を結ぶ例も増えたようです。

義塾の活動を見ると1881年がピークで、1884年には実質的な活動を終えています。義塾の全資産を府立宮津中学に引継いで、3年後に義塾そのものが解散したのです。天橋義塾の存続はわずか9年間でしたが、学んだ生徒数は約700名に上りました。

年月日	出来事
1874年1月	民撰議院設立の建白
1875年7月1日	天橋義塾の開業
1876年	地租軽減要求の農民一揆
1877年2月15日	西南戦争勃発(士族の反乱)
1878年7月	府県会規則制定
1879年10月	徴兵令改正
1880年12月	教育令改正
1881年4月17日	宮津・智源寺で大懇親会開催
1882年6月	集会条例改正
1883年4月	新聞紙条例改正
1884年9月	府立宮津中学に引き継ぐ
1884年10月	自由党(板垣退助)の解散
1885年8月	教育令の再改正
1886年4月	中学校令公布
1887年10月	天橋義塾の解散

当時、義塾と呼ばれるものは120余校ありましたが、京都府下ですと竹野郡間人の^{たいざ}城島義塾、南桑田郡(現・亀岡市)の^{えいか}盈科義塾、^{つづき}綴喜郡三山木(現・京田辺市)の南山義塾が有名な存在でした。新島襄も関心を寄せたようで、天橋義塾で講演をしたり、南山義塾の開校式に臨席していますね。

これらのいずれもが、天橋義塾同様に、政府ならびに府の弾圧を受けて廃校に至っております。他府県でも同様ですが、京都府の場合、豪腕と言われた^{榎村知事}榎村知事の存在が大きかったようです。彼は殖産興業面では大変評価されており、寮病院や小学校の建設にも尽力したことは有名です。しかし、士族の反乱につながる危険を民権運動や結社の中に感じたに違いありません。

「板垣死すとも自由は死せず」 板垣退助、岐阜で暴漢に襲われる(1882年4月6日)

遊説中の板垣が襲撃時に発したと伝わる有名な言葉ですね。巷間に広まったのは、小室信介が、「板垣退助の岐阜遭難詳報」と題して朝日新聞に寄稿したことが大きい。しかし、言葉とは裏腹に、板垣は比較的軽傷で済みましたし、一方、自由民権運動は退潮の一途を辿っていったわけです。

天橋義塾の果たした役割は何だったのでしょうか。閉鎖後に、大日本帝国憲法の発布(1889年)と翌年の帝国議会開催に結実させたことも確かですが、京都市待賢小学校の聾啞教育を発展させて日本初の聾啞院設立、既婚婦人のための教育の発展、また府下郡部における初の幼稚園開設なども見逃せませんね。その多くは人権活動の範疇で捉えられるものです。天橋義塾は、名称の通り、持たざる者を社会の表舞台に参加させた“懸け橋”となり得たのではないかと思います。

今日、普通選挙や教育を受ける自由などは、ごく当たり前のこととして誰も気にも留めない。ところが、現実を見てみると、そういう範疇こそが最も問題を抱えているような有り様ですね。空から自然に降ってきたものではないことを、あらためて顧みる必要がありそうです。